

最初のしるし (水をぶどう酒に変える)

ヨハネ福音書2:1-11

【新改訳2017】

- 2:1 それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があり、そこにイエスの母がいた。
 2:2 イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれていた。
 2:3 ぶどう酒がなくなると、母はイエスに向かって「ぶどう酒がありません」と言った。
 2:4 すると、イエスは母に言われた。「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません。」
 2:5 母は給仕の者たちに言った。「あの方が言われることは、何でもしてください。」
 2:6 そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、石の水がめが六つ置いてあった。それぞれ、二あるいは三メトレテス入りのものであった。
 2:7 イエスは給仕の者たちに言われた。「水がめを水でいっぱいになさい。」彼らは水がめを縁までいっぱいにした。
 2:8 イエスは彼らに言われた。「さあ、それを汲んで、宴会の世話役のところを持って行きなさい。」彼らは持って行った。
 2:9 宴会の世話役は、すでにぶどう酒になっていたその水を味見した。汲んだ給仕の者たちはそれがどこから来たのかを知っていたが、世話役は知らなかった。それで、花婿を呼んで、
 2:10 こう言った。「みな、初めに良いぶどう酒を出して、酔いが回ったところに悪いのを出すものだが、あなたは良いぶどう酒を今まで取っておきました。」
 2:11 イエスはこれを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

【祈りながら考えよう】

- (1) 結婚は、「キリストと教会の奥義」を教えるものであるとどうして言えますか。
 (2) イエスがマリヤに「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません」と言っている意味を説明して下さい。
 (3) 2章11節で、イエスが行われたわざを「奇蹟」と言わずに「しるし」と言っているのはなぜですか。

【解説】

(1) 主は結婚を尊ばれた

《それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があり、そこにイエスの母がいた。

イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれていた。》(1-2節)

3日目とは、主がガリラヤに滞在して3日目のこと。この日は、カナで婚礼があり、イエスの母もそこにいた。イエスとその弟子たちが婚礼に招かれた。結婚式に出席されたことは、恐らく主イエスの地上での宣教における最初の公の行為であった。

結婚は、人間の益のために神が制定された人間生活の一形態である。結婚は助け手を得、また助け手となる制度である。

「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」(創世記2:18)

結婚によって男性は協力者、助け手を得ることになり、女性にとっても同様のことが言える。女性には男性にないものがあり、助け手として機能



婚礼があったガリラヤのカナ

する時、真の自由を得ることができる。夫と妻は、互いによって初めて一つの完成されたものとなる。男性は自分を完成するために女性を必要とし、女性も自分を完成するために男性を必要とする。また、夫婦となって連れ添うことによって互いの孤独の問題を解決することができる。

また、墮落後の人間の生来の性質のゆえに陥りやすい性的罪から守られる(1コリント7:2,9)。これは、消極的な意味に思われるが、きわめて現実的な理由でもある。また、付加的意義として、キリストと教会の奥義的關係を学ぶことができる(エペソ5:22-33)。

結婚の絆が軽んぜられるような社会は、決して健全な社会ではない。結婚を軽んずる者は、キリストの心を持っていない。ガリラヤのカナの結婚式に臨席され、最初の奇蹟をもってそれを美しく飾られたお方は、常に変わらぬ御旨をお持ちである。聖霊も使徒パウロを通して「結婚がすべての人の間で尊ばれるようにしなさい」(ヘブル13:4)と教えている。

(2) 喜び楽しむのも決して悪いことではなく、ふさわしい時がある

主は「ガリラヤのカナの婚礼」の客となられた。「パンを作るのは笑うため。ぶどう酒は人生を楽しませる」(伝道10:19)と書かれているように、主は、祝宴もぶどう酒を用いることもよしとされている。

キリストのしもべたる者は、競馬やダンス・パーティー、劇場など、たとえ罪を犯すのではないにしても、軽薄さと浪費を助長するような楽しみに、いささかもかわりを持ってはならないが、同時にキリスト者は純粋なリクリエーションや家族の交わりを、積極的に持つべきである。



ユダヤ教徒の祝宴風景

キリスト者にとって、喜びに溢れた快活な精神は、福音の証しともなる。陽気で、いつも純粋な喜びに満たされることのできる心は、計り知れない価値のある賜物であって、それは偏見を和らげ、道からつまずきの石を取り去り、キリストと福音への道を備える。

ところで、キリスト者は今日、ぶどう酒に対してどのような態度を取るべきだろうか。時として、ぶどう酒は医薬として処方されることがある(1テモテ5:23)。

しかし、食事の席で、ぶどう酒を飲むかどうかについて、キリスト者に求められているのは、どのような状況や文化であれ、賢明な振る舞いをすることであり、何よりも主の栄光を求めることである。

神からの良き賜物を拒まないと同時に、「ぶどう酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい」(エペソ5:18)と、聖書が特に警告していることを忘れてはならない(ロマ13:13、ガラテヤ5:21、1ペテロ4:3)。

そして一般的に、節制を失わないように、と聖書が警告している(1コリント6:12)ことに、信仰者は心を留めなければならない。また、何よりも、聖徒は他の人をつまずかせるような、いかなる行動からも身を引くべきである(ロマ14:21)。

(3) 母親の指図ではなく、御父の御心に服しておられる

《ぶどう酒がなくなると、母はイエスに向かって「ぶどう酒がありません」と言った。

すると、イエスは母に言われた。

「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません。」

母は給仕の者たちに言った。「あの方が言われることは、何でもしてください。》(3-5節)

主イエスとその婚宴に出席されると、ほどなくぶどう酒の備えが底をついた。当時、婚宴にぶどう酒はつきものであり、当時の人々は「ぶどう酒なければ、喜びなし」(ユダヤ教文書/タルムード・ペサーヒーム109)と考えていたから、婚宴の途中でぶどう酒がなくなってしまったということは、世話人にとっては大変なことであった。

それを知ったイエスの母マリヤは、イエスの所へ来て、「ぶどう酒がありません」と、その問題を主に打ち明けた。マリヤのこの言葉が何を意味するのかを詮索する人がいるが、これは、おそらくマリヤがイエスに向かって、ぶどう酒がなくなったから、弟子たちと一緒に帰らなさいと促したわけでもなく、また何かをしなさいと催促したわけでもなく、ただその事実をありのままに告げただけだと考えるのが自然である。

おそらく、マリヤとイエス親子の生活は、どんな時にも、喜びを共にし悲しみを共にしてきたとのだと考えられ

る。他の人の喜びも他の人の悲しみも共にして、分かち合うことが自然になされていた、美しい家庭であったと思われる。

その時、イエスは何と答えられたか。

「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません」

「女の方」という言葉は尊敬を含めた呼び方で、英語で「レディー」と言うのに近い(ヨハネ19:26)。ここで、イエスが自分の母親のことを「女の方」などと呼ぶのは無礼ではないかと考える人がいるが、当時は別に無礼ではなく、しかもこの時には、イエスはすでに公生涯の生活に入っておられて、「お母さん」と言うことはむしろおかし

い表現であるから、これで問題はない。
むしろ、「あなたはわたしと何の関係がありますか」という言い方を正しく理解する助けになると思われる。ここで、「お母さん」と言わずに、わざわざ「女の方」とイエスが言われたのは、もはや私的な親子関係に生きているのではなく、救い主としての公生涯の生活に入られたことを意味しているの、もはや親子の関係よりも「公生涯にあって、御父と子なる神の関係で生きておられること」を表している言葉であり、神からの使命を遂行するに当たって、主が母親の指図ではなく、天の御父の御心に完全に服して行動しておられることを示している。

母マリアは、すでにそのことを知っていたから、すぐに了解して、給仕の者たちにこう言った。

「あの方が言われることは、何でもしてください」

マリアのこの態度は非常に重要である。私たちは自分たちの思いで、主イエスに働いていただくのではなく、主イエスのご意志を優先すべきであって、主の時が来るまで待つという態度を取らなければならない。私たちが主を動かすというような思い上がりは、厳に慎まなければならない。

(4) 水がめを水でいっぱいにする

《そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、石の水がめが六つ置いてあった。

それぞれ、二あるいは三メートル入りのものであった。イエスは給仕の者たちに言われた。

「水がめを水でいっぱいにしなさい。」彼らは水がめを縁までいっぱいにした。》(6-7節)

婚礼が行われていた場所には、それぞれ二あるいは三メートル(80ないし120リットル)の水が入る、6つの大きな水がめがあり、この水は、ユダヤ人が自分の汚れをきよめるために用いられていた。



水がめを水でいっぱいにする

マリアが給仕の者たちに、「あの方が言われることは、何でもしてください」と言い置いて向こうへ行ってしまうと、すぐ主の時が来た。

主イエスは、6つの大きな石の水がめに、「水でいっぱいにしなさい」と指示を与えた。給仕の者たちは直ちにそのとおりにした。

奇蹟を行うに当たって、主は手近にある道具や施設を用いられた。主は、水がめを用意し、それを水で満たすところまでは人に許されたが、それより先、主がなされたことは、誰にも真似のできないこと。

何と、その水をぶどう酒に変えられた。水がめに水を満たしたのは弟子ではなく、給仕の者たちであった。こうすることによって、主は、何かトリックを使ったのではないかと、という疑念が起る可能性を排除された。

そればかりではなく、水がめは縁までいっぱいにされた。したがって、水にぶどう酒を注ぎ足した、とは言えなくなった。

(5) 水をぶどう酒に変える

《イエスは彼らに言われた。「さあ、それを汲んで、宴会の世話役のところに行って行きなさい。」

彼らは持って行った。宴会の世話役は、すでにぶどう酒になっていたその水を味見した。

汲んだ給仕の者たちはそれがどこから来たのかを知っていたが、世話役は知らなかった。

それで、花婿を呼んで、こう言った。

「みな、初めに良いぶどう酒を出して、酔いが回ったところに悪いのを出すものだが、

あなたは良いぶどう酒を今まで取っておきました。》(8-10節)

6つの水がめが水でいっぱいになると、主イエスは、「さあ、それを汲んで、宴会の世話役のところに行って行きなさい」と言われた。

今や奇蹟は起こった。主は給仕の者たちに命じて、容器からその一部をくみ、宴会の世話役にその中身を持って行かせた。このことから、奇蹟が一瞬の出来事だったことがわかる。一定の時間が経過してから水がぶどう酒になったのではなく、1、2秒の出来事だった。

宴会の世話役とは、食卓の配置や食事の準備をする責任者のこと。

給仕の者たちがそれを世話役のところに行って行くと、その世話役は、なくなってしまったぶどう酒が、今度はどんなぶどう酒で補われたのかと思って味ってみると、それは前のものよりも上等なぶどう酒であるので驚いてしまった。



上等なぶどう酒だね

そして、花婿を呼んで、こう言った。「みな、初めに良いぶどう酒を出して、酔いが回ったところに悪いのを出すものだが、あなたは良いぶどう酒を今まで取っておきました」

婚礼の席で、上等のぶどう酒を客に出すのは、風味が分かる初めのうち、というのが当時の慣例であった。やがて、食べたり飲んだりしているうちに、ぶどう酒の質が落ちても気に留めなくなる。ところが、この婚礼に限っては、最後に出されたのが上等のぶどう酒であった。

(6) 主イエス・キリストの全能の力

《イエスはこれを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。

それで、弟子たちはイエスを信じた》

水をぶどう酒に変えたのは、しるし、つまり、意味の込められた奇蹟であった。この奇蹟には、イエスは確かに神のキリストであることを示す意図があった。この「しるし」を行われた主は「ご自分の栄光を現された」。

主は、ご自分がまさしく肉体をとられた神であることを人間に啓示された。弟子たちはイエスを信じた。ある意味において、弟子たちはそれ以前から主を信じていた。しかし、今、その信仰は強められ、主への信頼は深まった。

主イエスは、ほんの少し意志の力を働かせただけで水をぶどう酒に変え、こうしてすべての客の必要を満たされたのである。この奇蹟が行われた方法については、特別に考慮する必要がある。奇蹟に先立って、あるいは奇蹟に伴って、どんな目に見える形の行為もなかった。

主イエスは、水のいっぱい入った水がめに少しも触れなかったし、水の性質が変わるように命じたり、天の父に祈られたりすることもなかった。主は、ただ水がぶどう酒に変わることを願われただけであり、そしてその通りになったのである。

聖書の中で、このような仕方で奇蹟を行った預言者や使徒はひとりもないし、そのような力あるわざを行うことができるのは、ただ神なるお方だけである。

主がここで示された、意志による全能の力と全く同じ力が、今も主を信じる人々のために働いているということを思う時、それは我々にとって大きな慰めである。

主イエスは、私たちが救われるように、日々の霊的が必要と与えられるようにと「願われる」だけで、あたかも主がかたわらに立っておられるのと同様に、キリスト者は守られ、十分に満たされている。

主イエスの意志の力は、その行いと同じほど力強く、確かなものである。「父よ、わたしに下されたものについてお願いします。わたしがいるところに、彼らもわたしとともにいるようにしてください」(ヨハネ17:24)と父なる神に言うことのできた主イエスの意志は、天と地における最高の力を持つ意志である。

弟子たちがこの奇蹟によって信じたように、主イエスを信じることのできる者は幸いである。そして、いつの日かカナの婚礼よりももっとすばらしい結婚の祝宴が開かれる時、主イエスは花婿となり、信者たちは花嫁となる。



イエス、水をぶどう酒に変える (ヨハネ2:1-11)